



我樂多文庫下
 日下多楽多思某

本間文庫
 文庫 14
 A 6
 2



五五集

たて二寸一分

横 四寸四分

たて四寸横九分の紙

五五集
五五集
五五集

青竹の杯の色

甲の燭

矢は五男色と云

白菊投身の画あり

春宵時流のころと左の燭あり



印は朱の
ふんれ
ら

く

(白鳥)

我樂交文庫才五輯目錄

雨後月才三節

鴛鴦鳥比翼才力

二幅対美才主安(繪入)

借紙貝屏風才五回

花曆才三四(繪入)

倭題畫栗餘段一乃亦

娛目奇話才二

醉才一

保才伴余歌

春画家董

洋水居士

貳世由亭

半可画人

夢画舍

春画舍

植耕亭

春画舍

合

右の一篇は洋画防作の二冊分

書生七有和の内
不田画才

端歌小倉記錦

伝田尾友

和歌

狂歌

詩

白鳥存記

書生七面相二

繪探志新語一

明治十八年十二月十日

社 告 告 告

社 告 (朱書本多但全部)

これより子卯の夜 本誌へ批評せんと心に

随立思子残を張つたて着水子細いよとてし

た人かなすよま文座へふつつけ

写免山へ



鴛鴦此翼大刀

第一節

紅士歎かす命時伏剣
義士因義切説利害

神社家来のついでに弱冠をまゝく志はひて諸父
又流寓^寓されしころの辛苦を吐き出後應仁以来
乱れぬさしもの天下を平むし大江戸の郡會を
開きたるをいへば上下大に安堵して大名社旗下民
而嬉々々々鼓舞して吾平を証ひしはは軍征の
の流しアメリカ渡来の以てたゞの事ありて四方
尊王攘夷の徒起り諸藩の浪士も此の志を樹て横

行可早之を制す。事竹を以て孫更なる將軍に
定公は他界せし。後將軍が威を擁して
根中將田外子威權を奪ふ。伊水は之を
と移す。三取四天の面々も皆切か。徳の
あつた。御高十五石。後位少將酒井新樂殿
顯公は榊原田邊氏に御托す。今かく將軍の
威を神祕の運送す。一は基礎の西後と
難。一は神祕の運送す。一は基礎の西後と
をばかす。日夜に事なげ。多きもの。日

に腕を現し。さきりか打て。さきりか
は。いとも。さきりかの事もあり。感
に也。茲に一つの不吉とす。此頃
かしき。一は正氣と
為。王を。一は依
尚。と。さきりかの事もあり。感
と。さきりかの事もあり。感
依。草。さきりかの事もあり。感
つ。と。さきりかの事もあり。感

滑稽見屏風

中五回

半可通人執作

かくて大騒し夜と号し鐘まかりて皆々寝床を言
 入れば書の懐小と酒の酔前後七老の高軒磁了
 一役も多うまひすしくギケくさしたる舟底の枕は指
 の音たけ傳きぬく船はいつしうも天を考何そと
 つころ夜は波同多あけりる鳥見
 されをのろ人はいそりゆしくお餉と調へ宿危
 そま出でくいそや由敵危の舟天を参詣さんとて坂
 道へうりる雨側の貝細工を類殿く在りな女房の

細七増修と亦
む事々々も
可なり

やるべい。ア「イエお菓はくじさぶすも。その二葉ま
してくじを。それわねえの性なつたそまを
合のつてのさめ。ト「イヤカをのく。止まぬけの
節どけまへへ代物と。伊人の咽喉がいつへのかと
あや。ア。それらの息界の下をえやのつて。ねたりくさ
は。キョウいめへく。い。安心ニヤんといふあや。ク「任方が
女。おめへト「猿の字。ト「モリテ其水及ぼれ。とニ葉や。
細七は言く。ト「お。ト「へ。これと。しき。ア。すとの
とが。あま。とん。ど。り。心。持。ま。な。ま。し。と。サ。テ。自。休。も。合。は
思ひきつて打つけ。ト「は。説。き。し。と。如。が。白。菊。も。イ。ヤ。と。は

い。か。り。祓。足。弟。の。契。を。結。か。ま。し。と。う。を。れ。が。と。り。す。ま。の。は
互。ひ。の。ゆ。く。な。り。ま。の。日。禊。を。心。で。女。引。を。し。し。と。う
り。と。う。月。の。打。雲。を。な。れ。と。わ。り。下。と。れ。あ。と。な。く
この評判が。寺一面を。あ。ま。し。て。白。菊。と。み。い。し。り。れ。り
あ。つ。夜。コ。ツ。リ。寺。を。抜。け。ま。り。て。江。の。島。へ。ま。り。ま。り。ま。り
た。一。人。の。船。頭。を。あ。ま。し。し。と。う。の。あ。ま。一。系。の。扇。子。を。手。後
して。あ。ま。ま。り。し。わ。れ。を。手。ね。と。く。人。を。あ。う。た。こ。れ。を
わ。て。し。て。れ。と。し。て。可。愛。相。と。う。海。の。下。層。層。と。な。り
ア。し。と。ク「カ。ク。一。身。無。阿。弥。陀。佛。ト。ナ。リ。花。ん。の。竹。ま
は。り。ま。え。へ。尻。か。水。を。くら。み。ん。た。う。う。ア「ス。ルト。自

大言を猪尾に

好顔内才の
一服日者各心と
るて人たま

るさへまのしめりか。自らの身も引交した日
りや。苦みかすのり年経ほねへ。テウあ互に。ケ
ト。一。あ互ひも。しよ。子。は。け。つ。て。丸。へ。て。へ。と。て
いろの意のしよ。は。あ。り。へ。た。ち。の。か。ら。ま。ね。へ。話
だ。ケ。い。く。う。ぬ。一。人。か。色。男。か。つ。て。鏡。と。女。か。不。承。知
ト。や。天。保。不。日。様。で。直。打。た。け。し。通。用。い。祈。く。不。承。知
こ。の。運。中。で。お。水。が。色。男。と。し。し。重。と。ま。ま。い。い。一。人
か。り。や。あ。西。人。い。て。不。ケ。こ。こ。で。三。人。か。白。鳥。道。善。狂
歌。合。せ。と。し。し。権。し。を。や。り。や。下。鏡。が。一。着。で。こ。り。つ
けて。其。歌。と。紙。か。い。て。4。ヨ。イ。と。海。へ。投。這。正。其

囀るる安き
そりす

甲で水底へ引こまれた紙のまが。白鳥道善。因。ゆ。水。され
た。と。て。運。中。色。男。の。総。督。は。名。作。た。ら。う。ス。ド。コ。イ。ワ
ぬ。々。古。い。節。と。権。ま。つ。う。う。の。頭。向。は。面。赤。い。仁
五。杯。中。々。珍。奇。の。名。男。た。と。相。談。と。し。し。と。り。ひ。て
茶。屋。の。床。几。を。文。台。ま。り。つ。有。令。の。短。冊。は。鼻。紙。代。身
小。巻。と。出。し。い。ち。と。頭。向。は。こ。つ。た。る。三。人。思。ひ。ま。の。外
の。網。七。は。飛。ん。ど。相。判。喰。ひ。さ。お。て。あ。く。か。た。り。し
囀。き。け。る。

式世由亭評。回の脚色は之を前回は比れば大く
あかりた水も更々其痕跡をこころし得るる皆稽考を

喜同を神綴し入りの後こそ尊けり此等の跡こそ
俊れたれ (こは朱書なり)

思ふ外史自方喜新糸の祝詞

五日乃舎董

酔きり (擬老松)

巧なる哉
ぬなるこ即

三月のやうに。何品又^再の慶さ。
二間のまゝを切らう。たのたふらそ又す。座敷開き。
主人の頼。鏡と俄うつら捨て。蕎麦をきり子並べ。
しうを。冬もこれとあまうしと今更うまうち喰ふ。
いくら喰へしつゝぬえは。口を開き腹をけ。五徳方。
そ。福あふゆ。ふとりの紐をきり。な。硯反社頁の人。
な。そ。世を誇り。き。喰。扱。け。と思。外史は。譽。り。と。る。

あこし子月おたきころ里敷。いそりの草を天代十。
さうけり舞ふと飯甲のいそり針を馬鹿踏。あは
くくくと夕鴉鴉。笑へる声こそなりし水。

原ええ松

そちの松の目かたきと。萬あまよくれ。十公の糖ハ
子松の縁をふりて。こんのいろを見ん。秦の始台
の河狩のとき。え俄みのきりも。大雨しきり降し
ころを。高帝雨としとんと。少松の陰まうり給ふ。う松
のうら大木と。なま。枝をたれ昔と。うね。こり同す。同
そふさきて。その雨をわさい。ま。う。高帝大夫と。子

尚好と。い。ま。い。始。り。松。を。大。ゆ。お。と。申。と。う。や。
う。や。い。ま。い。た。ま。松。の。枝。を。川。果。を。う。田。鶴。の。松。を。は。
ま。み。ま。さ。う。け。り。少。子。孫。は。公。毫。の。人。こ。う。い。の。の。を。水。
絶。え。せ。ぬ。金。銀。珠。を。と。う。く。く。と。こ。う。の。う。ち。に。
た。よ。う。り。こ。を。日。を。い。し。け。れ。

佛を革命の二歌

本歌 夏 鳥
（子）のうみけ
鳴る 鹿の 声きこゆ
不 朽の 木

本歌、喜すきて夏来まけし白妙の夜ほすふ天のかくい
ころし上。夜干す山。アスエやしやんせ春しんくうの
木之。モレ夏つまぐてはな。い。いな。

永き夜

詞子「忍恋跡は」

本歌、可来臥まの鳥のまの瓦をの長を。夜を独りかへん
秋の夜長のうらみかき。意き人を待たぬて。寒き小
すわま。く。と。独り。の。身。の。ほ。ろ。き。よ。

奥の鹿

詞子「紅梅」

秋月を吹れてあはれ散る。紅葉や寒き奥の鹿
身をまよふ鹿。なき。あ。く。声。の。入。身。み。

柳亭種彦のしみまらぬ涙を

式世曲亭

思ひきやせをうすけのさるまゝ又柳亭のねむるちのさ

としころ心あいてうらやま交りぬ人の世に

かたむき方とよ給うせ世を去ぬれば

かひもけなき葉をまゝまゝの懐の種と

なりかゝるん思ひけく。 合

人傳の言をきくそな柳亭人な敷行きとも

思ひて思絶えよと思ふるをいそぐ思の種とこそたれ

幼き名も。雪うれのゆまなむいゝと画をえ

うなひが雪子交りし途がえ年とし高き候れと思ふ

忍意 合

心もあはれをむすびて神の涙をかくしつ哉

あなこころ 色亭主人

雷のけしと人なむらしてかゝるめり自身をくさ

年ころといふにうらまなりはる昔一言を得とせり

月をむらて人をあま 合

すもろをむらうがをほふなわのこよ人も月やみらん

東梅道中狂歌(おきりのりき)

春逝歌主人

ゆは...
深な...

吉原 安平のつゆいろとたからぬ美人のぬりて詠の富士の山也

蒲原 信島が原吉原あまのゆくとえ晴らうつらき由緒浦哉

沼津 羽衣のあらもやかくて風景を移るなりは飛行をてみよ

江尻 雉子おをひけんと鳴らん春の雨ふりぬるつづの牛糞の宮

鞠子 名物のとろけりやとなくと眠水は夢のうつの心地

国部 豆腐と名あつたふたたか何て目ま戸形の跡の不枕

島田 川原の嶋の宿は夜へ指をやらせりわをふりけり

掛川 色多き里あり葛布の号服店ぬり 一割 は掛川の宿

滝の川を越り 跡を 植耕 蛙 船

おれまゝの人と 舟 のつらや危花は招き 悪虫は留吹く

境の川名
吾々の

茶店子 歌ととらむとて

合

音々く音音の音づりて音なき筆の跡のあつて

川原月と詠ふ

合

水底の月をのぼる何れ印はく ほろろや空をふむらん

小きやうあめろ張月

夢夕のぼる橋

種まきの危き神をまきりてこきし菜のろほりの月

山嵐六つり月とえ

合

のらくまとなんものほろろと 覗くおすみの女をほき

白菊の考証

二世田高

引照書

鎌倉物語

江島大竹紙

鎌倉記

南畝考言

参考書

淡海録

滑稽詩文

按ずる。白菊の軍跡詳ならず。諸書を仔細とて尋ねたり。

は此本の田舎北野、今以上亦書を固り其直説を志す。

の事左の如し。

江島大竹紙巻二見か。澁の修文。見か。澁は名を

へ下の坂の岩下より行ふ昔建長寺の唐徳庵
 又自休庵主とよ沙門を重陸奥の信夫の人なり
 宿志ありて江嶋へ参詣す所を山中よりて美少乃年
 子身ひぬぬ主之を伴小翁とよは鐘舎相承院へ
 鐘舎の法号は若宮別当傳正院とよ鐘舎志は
 雪下相承院とよのくれば相承院の方云しゆめ
 翁とよ維也たると多ふ是より田て亦切子通せん事と
 末云水とよ絶て諸下の色をす橘とよかこたふらん
 切みきこむ水を白着たすけぬる有るをせんよとな
 さよぬる夜然水出た江嶋へ行きて扇子を懐子とよへ

曰く我と尋ぬる人ありてえよとつらて別れを甘
 扇子と歌を重

白着としよふ圓里の人とよい思入江の鳥と
 こたへよ

くき重を思入江の嶋上陸よりする余は信の下を
 と詠いけ倒し次あり此女を鐘舎の法号の倒し
 ありて奈初の夜をわきのへりたる信のけまのちの子
 砧取きて白着とよとよは水なり自休庵草
 未て此歌をえと思ふ咽び一律を賦す

懸崖岫処捨生涯

十有餘而相在刹耶

鐘舎の法号は
 奈初の夜を
 けまのちの子
 掛げす

花。頂。紅。顏。碎。岩。石。
 衣。襟。只。濕。千。行。淚。
 相對。無。言。愁。思。切。
 暮。鐘。為。誰。促。歸。家。
 娥。眉。翠。黛。接。塵。沙。
 扇。子。空。留。四。首。歌。

歌 2

① 白。着。の。花。の。情。の。海。海。を。夢。み。入。江。の。島。を。承。り。き。
 と。詠。ひ。て。亦。此。淵。の。身。を。控。け。たり。け。故。の。恨。可。測。
 と。名。付。く。と。夢。主。云。々。と。あり。鐘。念。志。も。亦。以。て。得。致。
 疑。念。何。事。と。も。し。あ。ら。う。相。似。多。く。之。を。真。没。と。は。
 い。い。つ。き。た。り。ま。南。畝。芳。言。は。鐘。念。志。を。の。み。引。き。て。
 其。餘。も。何。の。素。直。を。り。ま。か。く。と。福。永。也。既。の。是。殿。

我。此。年。多。く。入。春。中。
 五。月。廿。五。日。

花。曆。三。雨。乃。屋。以。
 其。多。也。屋。た。ど。了。挿。画。

子は若き也。

我如多又庫子七輯

雨日風々花月友子二回

青樓夢子字標子二回

此花草紙子一回

春宮編談花曆子六回

女丈夫名譽旗本子一回

開他云行の世の百子三

照对美少年次女子二對

一席中嘯素人の七張

半可通人

香白縁子

世里存人

春画金童

夢道金主大

洋水居士

山上京男

権耕畦船

北後土音詠之
柳林具

也後土音
蚊

荷の意

新作詩五首

都自之十一首

川柳十四句

奉啓句合

大坂節
夫曰
唄

当世
言
語

春也金董

羊可通人

柳耕蛙船

中可通人

五の金董

新美南史

洋水生

七曜吉凶占

尺八、一尺即切、天吹の通列

羊可通人

椎耕蛙船

思しれれく

死ぬるとは菊きくのせききせきき稚子わらわヶ淵ふち尻しりの帆ふかりり
舟ふねも又またゆゆりり

ハハニニココイイツツハハととんんたた夕ゆふ暮ぐら替か唄うただだ 4
よよななああええ飽あむむ秀しゆ詠えいたたりり町まちのの鉦かね印いんはは角かく兵へい
衛ゑい柳りゆう子こででまたまたたたんんややかかがが 出で来き袖そでへへちちななとと

来きははへへとと白しろ地ぢののやや回まわれれ七しち軽けいいい 羊ひつぎももんんををままとと重おもいい
嵩たかせせずずととももすすむむももののををいいつつたたららふふ子このの利きとと風かぜ味あじ
ををややららふふととほほ 十じゆ小せう燈とうががふふとといい 4
ののううれれははととううだだ 4
カカアアクク 4
ググソソシシのの

南なん推ずい宗そう祭さい一いち

古今集と讀よむむここ
たけがたけが一いちははらら
いい

後ご言ごん少せうややかかすす

南なん推ずい宗そう祭さい一いち 敷しき島しまのの道みちはは

三さんつつ子このの獨ひとり旅たびででおおははつつのの夜よへへ 毛けららくく ちちややううしし

ををししららんんややたた 水みづももすすまま 煙かえり花はなををままくく 敷しき島しまささへへ 大おほ

和わををままれれととやや 敷しき島しまのの道みちぐぐららいいはは心こころ得えてていいららうう

ままいいてて一いち万まんのの日ひ長ながししここ けけ狸ねこののややふふなな 頼たのまますす

一いち万まんのの日ひ長ながががすすままままいい 郵ゆう舟ふねのの下した足あし着きかか相あい

當あいいトトカカアア 敷しき島しま外がわ之の思し忌い三さん郎らう 町まち人ひとのの下した子こけけををまますす

ゆゆりりててみみけけををまますす けけのの悪わるはは 能のう言ごん矢や立たのの名なをを

用もち捨すははななとと思し心こころ三さん郎らうのの心こころををいいくく 4
かか

馬心二神四
渡網と云

胸
用
絶
致

早く
新
を
さ
す
却
り
あ
り

正、用捨れをなすやれ。神きうしやうな。神のまは
るはりひひせめう。自分物になくても。そりや
らんすか思却がよきうア。ト、ホントシク、コイツ
う、神の件をおえして。急な弟子入部してへの以
来、教授を福の、小のとせりして。ト、たれがそ
んな事をぬくすうり。ト、ア、虫まをなが見せねへド
ア、れ、あ、う、そ、と、ま、な、ん、と、い、う、と、は、い、ふ
い、小、了、簡、だ、ト、左、極、サ、独、造、と、一、人、甘、意、の、し、や、う
の、酒、の、相、手、を、刻、昆、布、と、つ、印、す、す、と、わ、く、く、ね、へ
ノ、ウ、鳥、ニ、ア、ン、ソ、ソ、と、い、う、ニ、三、竹、壇、た、し、し、は、

と、味、が、あ、り、い、ト、ま、な、め、ア、の、神、の、功、着、な
の、を、ね、ん、て、い、う、と、は、く、ら、う、や、あ、る、カ、
ソ、レ、チ、ヤ、ア、や、ま、う、ス、ア、ん、サ、え、レ、ル、ト、あ、め、へ、は、ん
一、倍、長、く、書、か、た、か、サ、そ、う、め、へ、の、う、う、ん、た、ら
小、ト、場、の、中、の、比、ぢ、あ、あ、の、め、へ、ト、そ、ふ、や、た、ら、う、
う、ふ、り、の、あ、な、そ、し、く、和、歌、と、い、つ、ほ、古、へ、の、心
を、用、の、人、を、お、は、三、日、三、晩、枕、ま、つ、け、事、と、言、妹、も、や
ら、ず、あ、ま、を、こ、り、し、た、う、と、ト、そ、ふ、た、か、が、そ、り、や
あ、め、へ、行、燈、部、屋、へ、ま、つ、被、つ、た、と、き、の、話、し、た、ら、う、
ト、と、い、い、へ、を、こ、う、い、ふ、と、俗、物、を、話、し、か、る、き、ね、く、

坂村の妙味ありえを除くの外
 日本滑稽小説家甲種たる
 を得たる者は鯉女のみ
 能高のミ今半可通人が
 此回の如きよと前者の妙味
 無くして而も後者の妙味
 有り才思の繼續筆跡の
 迅勁殆塵土の物非ず
 是は高甲の壓巻なり
 是回甲のオ二
 至妙至奇
 絶佳絶好

事の總て可とあらんとの生憎、うを
 一不きこの脚色は古き話の骨
 りて 浦鉾危が(灌釈師之) 鱧を退け
 寄せてつゝ此の乙換骨脱臼と云ふ陣腐
 といはんの着意の批評を要する
 この三人の中さういふ色男なるものは、
 諸君マアちろくごらん

女丈夫 伊高西母のバカ
 村のり 伊高西母のバカ
 伊高西母のバカ
 伊高西母のバカ

女丈夫 伊高西母のバカ 洋水居士

伊高西母のバカカンデーと、ロレンソの境に
 ドムレニーとて、昌ゆきとるはあつねと。淋からぬ一
 村のり、茲にジャンカークとて。そりきをもゆる加
 ときに。四條に親かきる女丈夫ありき。今その
 妻あさを尋るた。父母はえいと曲をまち川と。あす
 のサレたなと事、さうり。物の中をいよく強ひて、我
 理に銘し、さきあはは。お娘のジャンカークをわ
 かくる鄙ろく牧事ときに。せ、腰を身を強ひり
 (あつねをい) 男をい、さきあはは。事にはあつね。よきおれを

はげ^ハ梅^ウ檀^チ
ニ^ニ子^コあり

見合せ。ハリにトセ。賤かぬ市に^ハさせ。都
のてかりを^ハはせまな。政^シを^ハ後の^ハ也^ト。ち
さる^ハ事^ハの^ハち^ハか^ハか^ハは。と^ハ思^ハは^ハい^ハと^ハ切^ハれ
ど。片^ハ田^ハ舎^ハの^ハ思^ハさ^ハま^ハな。そ^ハ以^ハす^ハか^ハ叶^ハ便^ハさ^ハく。
そ^ハの^ハ意^ハを^ハさ^ハだ^ハよ^ハま^ハす^ハの^ハ子^ハ。唯^ハシ^ハ昔^ハの^ハ片^ハ股^ハに。
お^ハ言^ハを^ハ事^ハつ^ハあ^ハる^ハも^ハの^ハか^ハら。ジ^ハン^ハダ^ハー^ハリ^ハは^ハせ^ハれ
得^ハて。利^ハ及^ハの^ハ性^ハ似^ハる^ハも^ハの^ハ子^ハか。七^ハ子^ハ心^ハさ^ハく^ハに^ハほ
け^ハの^ハば。い^ハか^ハも^ハふ^ハして^ハ西^ハ親^ハの^ハ。海^ハの^ハお^ハき^ハ糊^ハ下^ハ。
ゆ^ハけ^ハは^ハや^ハと^ハあ^ハひ^ハり^ハは。朝^ハは^ハち^ハあ^ハる^ハ草^ハ豆^ハ一^ハ口^ハる^ハ
鳥^ハと^ハあ^ハる^ハに^ハゆ^ハら^ハを^ハ割^ハれ。田^ハ面^ハに^ハ出^ハで^ハ、草^ハを

ゆき。夕^ハは^ハ晚^ハく^ハ帰^ハ来^ハて。島^ハに^ハ喜^ハぶ^ハつ^ハる^ハ山^ハ羊^ハ羊^ハ。
牛^ハ馬^ハあ^ハど^ハに^ハ飼^ハを^ハふ^ハ。飼^ハ父^ハの^ハ娘^ハが^ハ帰^ハり^ハ飾^ハを^ハ。
見^ハる^ハも^ハい^ハご^ハも^ハ羊^ハ次^ハの^ハ侍^ハさ^ハく。己^ハの^ハ心^ハを^ハ飾^ハと^ハま
し。ゆ^ハか^ハしく^ハ世^ハを^ハば^ハら^ハす^ハか^ハら。元^ハより^ハ親^ハの^ハあ^ハと
思^ハい^ハが^ハ。か^ハく^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ事^ハと^ハせ^ハた。十^ハの^ハも^ハと
い^ハの^ハ一^ハ度^ハ腹^ハを^ハて。西^ハ親^ハを^ハ扶^ハけ^ハつ^ハ。ま^ハり^ハら^ハる^ハに^ハそ
他^ハ事^ハな^ハれ。
あ^ハの^ハジ^ハン^ハカ^ハー^ハク^ハは。赤^ハ世^ハ子^ハの^ハ妙^ハ敷^ハを^ハ不^ハ奇^ハま^ハる^ハ。
父^ハの^ハ女^ハえ^ハり^ハて^ハ。き^ハや^ハる^ハ親^ハも^ハあ^ハく^ハま^ハり^ハら^ハる^ハか。
下^ハ世^ハ備^ハは^ハる^ハオ^ハキ^ハ仕^ハの^ハ。世^ハの^ハ庭^ハに^ハお^ハい^ハさ^ハす^ハた。

董二日、社評下
 後角二る三ある
 中梅井の足と
 つのよめあし
 大つある
 白方
 かしく、海舟
 欄井の
 白方

凝る、岩をぬき、人目は、弱き、心ありとも。
 あり、母を、こころに、あはれ、こころ、こころ、あはれ、こころ、
 千甲の、か、に、ふ、思、け、セ、又、何、の、泣、ま、る、の、泣、け、
 め、て、カ、民、の、こ、め、に、ま、十、苦、を、甘、み、あ、ふ、百、敵、手、
 を、休、め、や、あ、い、せん、と、思、ま、い、ま、い、あ、い、の、心、
 ひ、い、に、ま、い、あ、い、の、み、解、念、ま、い、て、あ、い、な、る、た、
 折、り、ア、ー、リ、ン、て、あ、あ、ト、者、あ、う、白、術、巧、み、の、せ、
 あり、う、ん、一、日、人、又、語、り、や、う、セ、フ、ラ、ン、ス、は
 今、か、し、ま、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
 かり、後、の、よ、に、一、し、の、境、に、出、に、ま、い、ま、い、ま、い、
 (5)

牡丹の泣
 御守
 巧

一人の、この、か、る、因、り、あ、い、い、い、い、い、い、い、い、
 せ、
 には、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 づ、の、と、か、よ、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 し、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 里、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 に、刀、下、の、男、と、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 懐、狗、の、腹、を、あ、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 野、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 を、路、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、
 七、度、時、に、利、劍、剣、を、

さる処へ。横濱の親類が。色づかぬ仲も。こ
ろの由よりこのつて。中はナンカラウカカラウ
とみて。ツこましておぼせよ。近処へのつて
とく。又きつて。ゆみ子供が。帰つてまわして。
ツレハまわす。子。

柳替

羊可通人

羊可通人の月夜に柳と叫ばれ。羊可通人。柳と
とよあ。いふか。婦女を新い女姿。艶麗なといま
より。姉嬢といふんか。さかばせ。娘にありか。お大
け。おふ。柳。おふ。お白粉を飾る。色づかぬ
四月の。さつ。み。と。淡。春。く。西の。日に。後。影。を。して。
四月の。夕。に。三月の。横。橋。さ。す。の。内。に。ま。り
る。お。柳。は。城。壁。さ。す。の。お。水。つ。は。め。ぬ。お。ま。ま
る。を。待。つ。る。き。く。風。を。た。へ。る。お。ま。ま。三。月。の。夜

競ふ柳々一柳

権耕畦船利き

よれつものれつ喧嘩かふ流治かたとてわか
くぬ柳

柳京

判、飛ぶ喧嘩か柳治は二物お向ふ柳て記るもの

を喧嘩か柳治は二物お向ふ柳て記るもの

さうあふ人の初まにうれしか外か

喧嘩をよるかほそむちかぬ

くここよとよくぬ水

柳

ゆきし柳よふくくとこころの

飛治る

明高

判、飛向の古きよなるし

ほそ流の流は二物お向ふ柳て記るもの

柳

世甲子

判、すかたかきしく向うなるし

勢をよるかほそむちかぬ

さし

競ふ川柳 羊可斎

柳耕畦船利き

問?

三、羊可通(カ)つて、
 判、
 四、羊可通(カ)つて、
 判、
 七、羊可通(カ)つて、
 判、
 古きより言傳へて、
 かり但し、

乱

礼?

一、羊可通(カ)つて、
 判、
 二、羊可通(カ)つて、
 判、
 三、羊可通(カ)つて、
 判、
 四、羊可通(カ)つて、
 判、
 五、羊可通(カ)つて、
 判、
 六、羊可通(カ)つて、
 判、
 七、羊可通(カ)つて、
 判、
 八、羊可通(カ)つて、
 判、
 九、羊可通(カ)つて、
 判、
 十、羊可通(カ)つて、
 判、

せしは又界狭し故に人は人こそ是れ
リ

競ふ川柳 花見 椎耕畦船刺ぎ

一 ゆい娘花見に人の多しとるる

判言通近づく句さへも巧みと惜

事事は「人」より「は」ありとよき

ころろを指つものさへふればさりとな

和歌えびしあはれか点は人之

二 櫻の餅の土着はあ堵あり

判、句は巧まぬと云ふ近づくはれと
瓶の句は「あはれ」や「あはれ」は
餅しとあはれ古き餅のあはれは

三、土年の茶屋梅の花見をくむ

判、句は巧みと云ふは「あはれ」

あはれ土年の茶屋梅の花見の餅を梅

ありと云ふ句は「あはれ」をいかに

句の事をもつて「あはれ」をいかに

尚書内務 建誌

洋水

内閣総務大臣 トカケテ

針箱の出し

外務大臣 トカケテ

玄山草

内務大臣 トカケテ

尚書の 官

陸軍大臣 トカケテ

田月の ト

海軍大臣 トカケテ

佛島の トン

文部大臣 トカケテ

山かた

逓信大臣 トカケテ

ワンハ さい 見

大蔵大臣 トカケテ

仙は 大出の 大物

文部大臣 トカケテ

大の 孫の 階

心 雨後

逓信大臣 トカケテ

出雲の 大社

大蔵大臣 トカケテ

心 縁の 木

内務大臣 トカケテ

心 南の 原の 畷の 日

大蔵大臣 トカケテ

心 干城

内務大臣 トカケテ

心 道中へ 先へ 出さ 入

文部大臣 トカケテ

心 女の 手の 残

文部大臣 トカケテ

心 尋た 文

文部大臣 トカケテ

心 柳の 下

前後五面
ちのり

題

ナハ年ふりか天津風といつて。枯神はれくと
 する風ふき。後母鳥と花とよのひかりと花盛
 みるふく。
 監月即佳
 此日人の妻には大吉と款談の喜が顔を見る
 べし。おかしきお姉はさくら日也。
 いろ田男のあは生娘は太凶あり。西人の中あは
 野するをゆきまう。この上町の晩に入浴す
 べかりか
 け二他の風とほりみかり場でのこのあはさ帯をか

免職の官負トカケテ 心ハ 有徳
 地球をのがれと官負トカケテ 心ハ 月球を詠ふ
 行燈初屋 心ハ 燈のこり
 七曜吉日凶吉 半可也
 吉日即佳
 此日には五事大吉ありむかしは仇討の日と
 きまりさるもの

千両紙

可なり

魚の心は水なり
 この目女は持てる山。私自身に大吉、かかれ
 女房は男の首より男は首の返す事
 女房おほ。前以て金子二百両調寄りしをく
 べし。不意の入申して女は分自身喜んぬの如く
 見えし。さかど日さかす大吉事あり。狂言

胸の火
 この目凶あり。女は信持川は未だ見ぬ
 あべし。
 他家の婦人よはそまよくへかかぬ。
 夜更に帰をすべからず。
 角のある人鬼牙をちりし。あるはな

すゝは義大夫との書あをえるべしその已け
判然としれる。

金玉のなる木曜

お女狂をさす人。此日は出出すしやし家
におれを女屋の屋敷をさく。ちいし新衣へゆか
さる人は心配なし。幸抱人は大々喜之。この日
より金銀くさり出す。あとうさよのこいづぬく
麻草十木植い木をいそ植物を母結せし
ゆふえ。

二分金曜

忠義の
月あり
かたむけの
新衣の
判

此日凶あり。中心亭とつゝる男放を協して。
四十両の金子をつかえ果し。二分金のこせしとて。
前非を後校し日あり。此時目がさあれが吉み
かゝる。

故郷の土曜

この日人の平常の心極まる。吉凶の差別あり。
この日はきたるしや衣表をさかへ。は後銀を
さるべし。
義頼由よりいろくのせらあものあり。尤も出
銭か決山ありあり。

つえいん活き

我母多し又輝一りのあや

三田羊天カク平治め

尚代行行嘘ハる

蓋世美淡雨後月

傍此の如心亭針子

春宵綺話花麻田

協然と具之保風

而今風々花月友

乙とリハコト

妻の人の子のまよ

権耕蛙船

山上京屋敷甘

丁どの切り子

白春亭白起笑

西の草子通人

半可通人

蛙船

朱四世宇烟山原林

半可百々

美少年姿跋

春雪下鬼笑

赤几木の連懐

梨園の香吹

隅田堤

美の三回

東海遠征記

すゝめ切り

同前記

御前記 方人一首

都々逸

川柳

通計十四巻

あゝ冷めは 予ハ本林廿四のりん

予ハ大川筋の上

関行権ハ

甘田村中を為る尻ハホ甘石上

而後月ハ予ハ

花曆ハ予ハ

滑稽具屏風

半可通人

第七回

こいも三人名角と云ふ、われを男の免符と云ふ
 と、日比下村と云ふ男、お佛、お苦しい、何事か
 二祈念し、一はまサット午より紙を投せしむ
 川強く、波高く、しるしの紙も水へ流つて、つりくと
 産屋まほしき紙をめぐり、行衛し、おれもさうなる。
 猪カレ、これの紙も、海へ流ち、おれもさうなる。
 高きを、おれもさうなる。ハテサテ、おれもさうなる。
 手ご鈍、この同行も、おれもさうなる。おれもさうなる。

子。ト。ト。ト。色。い。と。あ。ふ。ク。レ。金。を。と。う。白。を。と。う。
チ。オ。ト。頭。を。赤。く。と。あ。ふ。う。黒。い。の。ヨ。ハ。ミ。ド。ソ。リ。ヤ。お。
女。へ。の。此。人。相。書。い。ク。人。相。書。も。あ。り。い。と。は。な。う。の。内。に。
細。セ。カ。ニ。テ。ラ。を。回。つ。ほ。か。を。と。ま。す。

作。者。は。大。蔵。を。へ。入。り。小。蔵。を。行。き。後。人。
の。名。カ。ニ。テ。ラ。を。と。ま。す。二。個。一。と。し。
グ。サ。ア。一。の。燈。の。あ。り。ド。イ。ク。穴。へ。這。入。り。十。
ニ。ダ。カ。は。が。り。い。ノ。ウ。グ。と。よ。義。も。あ。り。と。み。な。し。
カ。ニ。テ。ラ。を。と。ま。す。細。セ。と。え。へ。入。り。穴。道。へ。這。入。り。
チ。オ。ト。と。ル。ク。た。も。先。を。入。へ。ぬ。へ。自。身。を。つ。ま。れ。そ。
あ。ふ。グ。その。自。身。を。と。ま。す。ト。自。身。を。つ。ま。れ。と。よ。と。ま。す。ア。自。身。

の。穴。へ。指。を。つ。つ。こ。ま。れ。利。い。と。よ。が。い。オ。ト。と。あ。ふ。
ゆ。へ。チ。人。の。事。を。い。は。れ。と。自。分。の。用。心。を。し。ぬ。ト。ス。
テ。キ。と。あ。い。ほ。こ。の。道。い。ナ。グ。で。こ。ほ。こ。と。い。い。を。知。ん。
い。親。父。と。思。ふ。い。す。チ。神。子。傳。の。而。を。あ。う。け。る。カ。
オ。ト。つ。て。へ。グ。と。し。を。し。ぬ。チ。雷。が。神。の。木。へ。
舞。こ。ん。と。ト。雷。も。あ。り。の。わ。き。が。あ。り。自。身。つ。ま。み。で。
ら。う。グ。レ。モ。ヤ。つ。け。う。自。身。つ。ま。り。い。チ。た。か。り。い。加。
減。の。堪。忍。し。ゆ。へ。こ。れ。が。胎。内。冥。界。を。ぬ。け。て。辨。才。
天。の。ア。ラ。へ。ま。す。ト。ム。リ。ク。ナ。ニ。カ。の。護。法。の。か。ら。い。ま。
つ。た。根。心。細。セ。と。ま。す。ま。る。く。あ。ら。ん。こ。う。し。ま。せ。

大平記句調
りくく味あま

4
長舞題日いふらん
うくお出わて山敷屋とくちを。綱せま、と世をとりせ
えの道そくどくち。嶋の入口ををくころは、ハハト
町のなま。あし引ゆなれい鳥居傍を干安を
こえて、せまを渡へく。ト、カ、カ、ふま、ほげ、治へ。暑
い。廣風の傍いのか。サッパリ身子染みぬへ。カ、カ、
らほと、本地の室い。う、あ、る、コレ、位、何、が、身、ま、
み、た、つ、て、かく、割、目、な、つ、も、ん、わ、や、何、へ。ト、ヘ、ン、サ、不、
ふ、見、え、て、も、栗、の、都、を、ま、を、た、ふ、み、ま、う、は、ひ、さ、う、つ
あ、た、つ、存、ま、を、射、あ、下、を、う、う、の、う、肌、も、な、れ、は、
な、

即妙

妙

引

これらは蓮山鉢女石とチーチーは蓮上人扱
かここで、ま、ち、の、間、新、食、の、舞、行、を、ま、ま、こ、ま、
こ、ま、い、ま、こ、石、の、形、を、ト、シ、ト、坊、ま、ん、が、膝、ま、ら、を
して、六、杯、舞、ん、の、お、や、を、ま、ま、い、ま、あ、や、ら、4、ウ、
ナール。六、杯、舞、石、の、意、気、を、六、杯、像、か、わ、り、い、ハ、思、心、二、
ん、ま、つ、ち、へ、ま、え、つ、て、入、舞、く、半、金、を、お、拂、ひ、垂、つ、て、
の、よ、う、こ、ま、い、れ、舞、く、い、い、こ、
思、心、即、は、あ、の、が、宗、と、あ、う、祝、れ、れ、を、ま、ま、4、代、う、ら、
甚、即、宗、と、あ、や、さ、う、え、ん、ん、六、杯、舞、石、の、世、の、あ、下、
ト、ヤ、ア、南、無、妙、法、蓮、華、經、の、舞、舞、題、日、

なほとくやめなう。ドンがり眼をいやすまらねへ。
が、夕店却しう。あいてくれ。こそ鈍的ソナチ
へすつちやげねへ。そちし平抱しねへ。平抱く
とりうてさつきが、あまのり。ふけりや。こ水がホント
のしんほ)ふまなりし。ち。悪心三候。亦女子。駭。極。海。の
文を配。翻。しして。ク。ハイサイ。あちらでし。両月とあや
る。ト。ト。ン。ダ。い。声。だ。ト。ッ。レ。あ。ね。へ。石。へ。け。つ。ま。つ。く。な。チ
オソト。承。知。の。傍。で。野。か。と。れ。の。ほ。と。あ。い。ド。い。わ。し。も
「北。た。事。だ。ク。コ。イ。フ。は。ら。う。ほ。ど。わ。り。い。と。あ。い。け。り。ま
ほ。つ。て。り。つ。の。ね。比。奈。切。通。の。口。へ。う。る。ク。こ。の。ま

尾。一。服。や。ら。う。さ。よ。と。み。を。く。床。几。ま。こ。う。ん。の。
葉。卷。の。ほ。い。ら。ッ。い。や。い。を。な。は。り。大。分。あ。り。ま。ん。
チ。ア。イ。あ。つ。い。ノ。破。糖。水。の。な。ん。か。を。ん。め。な。い。ハ。イ。ク。
而。破。糖。は。黒。い。う。ま。い。く。お。ま。や。あ。う。あ。う。い。う。ま。う。
ま。い。や。あ。う。チ。ヘ。ン。野。鳥。は。あ。あ。の。き。つ。い。ち。ほ。ほ。い。
ほ。れ。も。雪。白。よ。ハ。ア。ノ。雨。で。は。し。ら。ん。か。ま。う。チ。ナ。!
白。い。ノ。ヨ。ハ。ア。あ。い。ま。く。さ。ま。白。い。は。こ。さ。ん。ま。せん。チ。
それトヤ。坐。小。の。相。違。じ。あ。ま。の。小。便。す。い。つ。バ。ヒ。エ。
チ。あ。ま。の。い。と。な。事。ま。ハ。ハ。い。く。と。ひ。つ。こ。ん。て。ぬ。く。
ク。あ。ま。の。小。便。と。ア。ま。の。大。名。の。チ。ソ。コ。は。あ。ま。の。え

流石猪尾の

釋よ。こは廣道の事初分、馬の小便が、
取れつて、延虫婦の小便はきついもんたうよ。
水をわり何人とも、中々茶をうけ、休めを
江鳥鎌倉見物と云ふ、旅人四人、
うけつ。四丁五丁の夫婦、
男一人、いねも、
猪尾介早くと、
とひさ、
した。金と百圓ぬすんで、
丹餅を戻さるた、
MARUZED IV

ふべ、
取少の袴を、

朱書き

絶好、
如く、
以下次号

田 詠 狂 歌 一 冊

△ 白 鬼 船

△ 蛙 船

△ 給 仕 する 下 女 あり つかう 徳 意 して

△ ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら

△ 朝 日 くる は こ べ つ ち ら も ぢ ら 小 娘 の

△ ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら

△ ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら

△ ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら ち ら も ぢ ら

ちやありか。女の亭主かどころはみろ。いもの
女房かどころはみろ。テモ元は、女の亭主かどころはみろ。
下見、女房は下女かどころはみろ。

やめついでにみろ(未書)

都

擬江に投節詞

於美人傳史

いまは名残もつきせぬ夜半まよく四からほが
下もきわく

かち一聞そえ一面影はしりかゆりや初や

寒い雨狂の女の友千鳥 甘藷のあそびでうらみなき
今體

えうちやこころのーれな、西爪わたしやき爪
そむふをう

下戸のわたしがけふはみちちやーつと苦る茶椀御
勤する身がひつねぬまを思ひつり、船々の事

恋まこころの女猫の首輪印くなるを思ひつり
ほつれたしてはとそむぬちのよ嬢心とまうの糸

親の男見も運ぶわーや胸を釘をぬくころ

緑竹年久

三 暮をみどりの成庭の竹子と暮る雀も千代となく

三 里やうのふみもつ松と桃の苦みかまのふ一夜軍用

便をうらまを安んずるせむわらまの北のほろまきり

をりし昨日の朝ををえせむやいはわたりとこりすきう

免の辞令をめりけええを虞兮虞兮なんぞを

みうんせむ

狂句

楚の雪の雨ふりうそをつと書るをいひ

蚊やま火と兼念ふ君の民の富

無勢な書を鼻唄で唐詩選

營が田ひそこうす 柳斎人

長刀ををく身むうは槍もせ

地をぬちとつ東殿い犬の尿

柳 さる隠居茶のこを操る

ツイ放屁茶人^はの香をたき

たきき、西洋料理うけらう

月そふいもの遊天のまりの尻

橋さき実入のふり^は守

歌ふみ^はてき^はやうか^はをつき

正月あらう^はべい^は川と娘いひ

一合の傍り

冒頭寸分その
片文を御存
せしめよ文に
記あり

偽比ふ怒き 鈴巻上編
 葉の花にとぶ 蝴蝶、油が水にまゝ 出如鳥巻、のり
 としりけいしを しるものきく、 さと、水ぬか
 の道。 ずてそのさ身の情しり ちるさし
 うぬか木佛 石をせけ、色を 是空と 復ま
 とすし心の ちりこころ、いかに けり。 ちり
 かしを ちりあさし 果に、ちり 書さ ちり
 ちり。 今はとうしり ちり 呼子 自ち。 ちり
 は。 世の中、 ちり けい ぬ色 街都の ちり 下

青言下鬼笑仰

小川さる
張りゆりさる

旧作十のき

五日廿五る冬

祝友也

ちり

子を冠するは、さきより行はれし、
 「あつちを所くらは、後世の事あり。心算
 を」
 「事は、人より知りく。心算」
 「心算」
 「心算」

新案落語素人の子二對

大力男

春亭鬼針大伴

ちかし相木林き物とよ人のつまた、更科と申
 不、美人い、大力の女かおさのりありと。同前中
 に、好色の士にて、井上大九郎と申しか、この更科
 を入ぬめて、おかにゆして日頃の思を暗らさんと、
 さましく心を碎き、人知りか、書を書きつけと
 事もゆるいでひききす、か、一向さびく、書を
 かりやせん。そこであつた、牛とせかた、更科を

や
り

御下やがーとてええ、すけおをすくやうにさう
おしよゆえ、ちいよとらさ、あの日久松ま
かへ、コレム松也。ちよのままなまうとてヨ。
「ドウカをすれすしるか。」アイアノウこに
あちかへゆえぬいささやあごヨ。ツイ、い
ぶあいのまかつかあぬぶうんか、ふに三日、
あちかへあまきまうか、とてしやうし
「十一あまらあるかすれすれ、それちや
しよ、かへせん」
とのかうにーかゆあかどるぬあてい

れで、「モしあかえさるあ、
はあまへとの福あごあつしやあせ
いやとりあてしよのまな
かかしれういた。ソレハ大あま、
あかあてしすあか、
このあ、あまのあ、
提灯屋の息子
喜あまのあ
地蔵のあ
ゆきあまのあ
昔々言下御舟
開々あ
吉あまのあ
あまのあ

~~~~~

~~~~~

朱管 烟管 焚具

半可通人

白乃ぬのつくしき。真跡のみにくきまは。
 朱管のあかき花衣まきさる姿に、おしあし
 るかぬし。まゐるをめぐり、格子見え、巫山の雲
 とおじて、思を火血にこめ、哀別離苦の跡の
 由、梵其望の雨といふをてに、うかのをる屋をはじ
 す水草。静かなるのめぐりて、赤ん心をさす不
 仁や加へ、思入向る山にありまわると見ゆし。

MARUZEN IV

④

ぬ、親父の寝をいそむ。病屋のあつこきあぢあぢ
 也。故より君子抱病を高く。甘ゆの灰吹
 情まし。四川をきかた父母の貴い序をゆふらさ。
 苦界く。ういそつらいで。多葉粉の人でま
 のこか、面ぬ高屋の物思ひ。お茶あひりてこ
 衣見に、ほく杖づくしと胸の上を考る。胸り
 たりさくむかりあは、胎のさまりしゆるるあか。
 もうし。~~~~~
 煙屋さん。

煙屋をもておめあは、煙下縁詞をもて双方
 を形容す巧あかき

(美々あかき)

猫の恋

半可通人

鯉節のやうに口を腥がす。玉やと呼ぶ声も、
 ひろきひるを思寐の庵をうごいて。蛇の
 急なこころ。夜は朧月を懐水にて暖の
 のみ。あつとを追小。嬢は針の傍に
 を。蛇の。永の。鬼の。る。子。回。小。跡。掃。除。
 を。せん。の。り。ゆ。く。夜。目。と。並。み。や。み。と。照。さ。す。は。色。
 は。則。こ。れ。首。輪。の。鈴。の。カ。ラ。〜

一釋巧ま心経の色即是空まあす巧妙々々

満足難取易成。平生勉強不可_至。
夢夢未醒。放蕩萬夕。校中評判已_西。
畫。

懶性居士題

以下次々

智真心跡大將由_情大尺_謹

情 謹

而香_々の

他_々の_々は二_々

の_々は_々の_々

の_々の_々の_々

一
二
三
四
五
六
七
八

三十枚
三十七枚
三十二枚
三十一枚
三十二枚
三十一枚
三十二枚
三十一枚

一
二
三
四
五
六
七
八

以故ニ三十年間ニ
一節切盪觴定る事。尺八丈二懐れり。以
是亦やい懐れせり。初心抄巻一巻。宗佐
より始りぬとあり。又合書ニ一節切の懐行は
文祿慶長以盪觴之といへり。サト女ノイ
は節を一つこむ。故に一節切といふ。節を五下
方七寸上は三寸八分。一尺八分なり。
天吹一説ニ一節切を竹階座より天吹とよとい
ふ。此れも天吹は其製作久しく一節切と強なる
の如し。方概其長サ七寸二分。即ち一節切

の三分ニたり。故に節より上は一寸四分。下は五
寸五分。五寸五分。五寸五分。五寸五分。
以上尺八は一尺八寸。一節切は一尺八分。天吹は七
寸二分。孔を五つたは相同し。孔と。筒を長
しく強なり。是は細事。はくた。一尺八分。五寸五分。
唯、身より一節切を文祿慶長以懐れり。
是亦小は。すま。何れ。尺八。之を傳。推。布
の便。料。五。定。殺。以て長サを除。作。一。寸。
七。の。長。を。一。寸。八。分。一。節。切。の。調
子。を。考。ひ。權。の。調。子。麗。の。大。変。せ。り。の

八巻

銀初めを一人の男柳色の袖をきき
同じ色の頭巾をきききききききき
あききききききききききききき
しききききききききききききき
停まあききききききききききき
りききききききききききききき
ききききききききききききき
ききききききききききききき
ききききききききききききき

を作りしなり。さればこそ一節切の吹しも。指
つがひを十三なるふれ。のくれ右三番は珠の
なり。全知のなり。

をんこもあんなにけいこりおれよのい
「エ、ヨイからあつを申せよ」おかのい
あつをあり、ヨイおこさなれんらあは
のいよ大御の里こ

~~あつ~~あつを申せよ
大御の里こ

あつ けいこりおれよのい

あつ

あつ

あつ

あつ

あつ けいこりおれよのい

あつ

あつにけいこりおれよのい
あつをけいこりおれよのい

即五作す、不学甘落予、不学及予、
予、不学甘落予、不学及予、
予、不学甘落予、不学及予、
予、不学甘落予、不学及予、

